

令和7年度

第2回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和7年9月8日（月） 10:00～12:00

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会顧問

杉岡秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）

丹後「子育て」サポート協議会委員4名

多々納智（京都府宮津天橋高等学校 教諭）

野木俊宏（京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長）

櫛田 啓（社会福祉法人みねやま福社会 理事長）

稲本朱珠（与謝野町高校魅力化コーディネーター）

丹後「子育て」サポート協議会臨時委員

大井陽太（京都府宮津天橋高等学校 教諭）

河邊花観（与謝野町高校魅力化コーディネーター）

各市町教育委員会担当者

事務局（丹後教育局）



4 協議の概要「丹後の『子育て』関係者の協働を生むための協議会メッセージの発信について」

(1) 質の高い対話を生み出す発信にするために

ア 丹後PTA指導者研修会での協議会メッセージに係るアンケート結果から

- ・保護者と教員で印象に残るワードに違いがある。児童・生徒の主体性を重視する学校教育と丹後を楽しむ姿勢を重視する保護者という印象を受ける。
- ・結果から教員に地域の子どもを預かる地域の一員という意識は薄いのかもしれない。

イ 対話を促すメッセージの在り方

- ・協議会メッセージのみで充実した対話は難しい。例えば、アンケート結果にある保護者と教員の違いなどを話題にした方が対話しやすいのではないか。
- ・協議会メッセージの一部に対してオープンな問いかけの形にすると話し合いやすい。
- ・協議会メッセージを理解することが目的ではなく、対話のつながりが協議会メッセージである。
- ・感想のやり取りがあるだけで、対話のハードルが下がり、次の話が発展していく。そういったことが繰り返され、心に響いていく。

ウ 質の高い対話に必要なこと

- ・対話はそこで関わる人の立場、対象、年齢によって質が変わる。
- ・互いを知っている関係であれば対話の深まりが変わる。

エ 子どもの親世代の不安と協議会メッセージの在り方

- ・正解を見つけてきた世代の価値観の押し付けは望ましくない。正解が見つからないことに親は不安でいる。だから見守りができない。待てない。
- ・そういった不安の中で、信用のおける人から「待っていいんだよ」と言われると納得できる。

- ・協議会メッセージが有識者の意見から出来上がったものとなれば親の安心感へとつながるのではないか。

オ 子どもの姿から映し出される大人の姿勢

- ・子どもたちは正解を求めすぎているか。幼い子どもですら正解を出すことに縛られ、やがて忤度を覚えだす。
- ・同調圧力の中で意見の多様性が奪われ、変わった角度の意見を言う子どもが異端扱いされる空気が学校教育の中には存在しているのではないか。
- ・失敗する前に自分で限界を決めている子どもが増えていると感じる。大人が子どもに失敗させないようにしてきたことが、正解にこだわり、失敗を恐れることへとつながっているのかもしれない。
- ・成功と失敗が自分の中に積み上げられる経験が大切である。順位が付くものによって自己肯定感が下がることもあるかもしれないが、様々な価値観を提供してくれる大人による励ましや承認によって自らの成長が促される。
- ・子どもは、自分に寄り添い、伴走してくれる人と対話する。そこに一生懸命に本気で取り組める何かがあれば子どもは自分で物事を決めて、主体的に活動できる。
- ・子どもの活動を大人が決めるのではなく、子どもが自分で決めたことを大人がサポートする姿勢がやはり重要である。

カ 子どもの声を大切に作る視点について

- ・協議会メッセージに対する子どもたちの意見を聞くことも参考になるのではないか。
- ・協議会メッセージへの大人の評価として説教じみているという意見もあるが、自分で答えを見出そうとする子どもは受け止めるだろう。
- ・高校生と赤ちゃんのふれあい事業に従事する中で、当初は、高校生の多くが「子育ては大変」という後ろ向きの印象だろうと思っていた。しかし、高校生から赤ちゃんの保護者への質問には、「子育てで楽しいことは？」という前向きな質問があった。赤ちゃんの保護者と高校生という立場を越えた対話の中で気付かされることがあった。

キ 協議会メッセージの浸透によって促したい学校と地域の対話

- ・以前は地域の行事によって子どもの主体性が担保されていた。しかし、近年は行事の減少に伴い、学校教育が担う部分が負担となっているのではないか。
- ・地域と学校でそれぞれ何ができるかを考える。これにこそ対話する価値がある。
- ・学校教育の中での探究活動は、関わる大人にとって時間と労力、善意を消費する場合がある。しかし、地域協働という視点であれば地域と学校はWin・Winとなる。
- ・地域も学校も一緒になってみんなでやっていたことの価値を再確認する上で「協働」はキーワードになる。

(2) 効果的な発信について

ア ポスターや新聞広告等

- ・仲間集めのための発信から始める。協議会やメッセージの意図について説明することは難しいが、パンフレットなどに言語化された部分があれば、共感を集めることができる。
- ・そこに表現されている内容が自分のしたかったことと重なる人や、既にしてきたことを正当化されたと感じる人もいるのではないか。
- ・京都府子育て環境日本一推進会議の「泣いてもかましまへん」のように分かりやすいものでポスターなどがあってもよい。
- ・何度も目にする機会があり、問いが考えられるような内容の余白を感じさせるポスタ

ーなどがいいのではないか。

- ・段階を踏みながら仲間を増やしていけば地域も変わっていくのではないか。

イ 発信する相手と場

- ・基本形の協議会メッセージでは情報量も多く、子どもの世話をしながら読むことは難しい。待ち時間がある場などに置くことは有効かもしれない。
- ・例えば、子どもの健診、予防接種の待ち時間での配付や病院の小児科での配架など。
- ・子育て支援施設などにも多種多様なパンフレットやチラシが置いてある。イベントのチラシなどはよく持ち帰られるが、協議会メッセージなら見せ方に工夫が必要になる。
- ・イベントは大勢の人たちが情報を取りやすいが、理念を浸透させるには何度も伝えることが必要である。発信して終わりではなく、具体的なエピソードや実践エピソードを添えることが望ましい。

ウ SNS

- ・一度検索すると情報が自然に入ってくるようにSNSで周知してみてもどうか。例えば子どものイベント情報を追っているところに出てくるように載せたり、市町のLINEに載せたりする。
- ・協議会メッセージにデザイン性があると市町に依頼しやすくなる。
- ・地域の子育て支援団体などのLINEで共有してもらう。素早くターゲットに届くよさがある。

エ 地域に育てられた人財を“伝え人”に

- ・丹後地域には祭り等を通して、大人たちに認められ、失敗しても認められる素地がある。そんな風に地域の宝として育てられ、その感覚を背負ってきた人たちがいる。
- ・地域を背負い、互いを尊重し合う30代、40代が確かにいる丹後地域は捨てたものではない。その人たちは、“伝え人”としての存在感が大きい。

5 助言（杉岡顧問）

(1) 協議全体について

- ・協議会メッセージの「立場をこえて…」はまさにこの場。
- ・この場の心理的安全性がとてもよかった。教育が専門分野ではない方にも、様々な気付きがある。
- ・このような場所を丹後地域でたくさん作れることが重要である。

(2) 対話する上で大切にしておきたい視点

- ・「対話」の逆は討論、議論。つまり、目的が意思決定である。それに対して、「対話」の目的は相互理解である。
- ・心理的安全性の図られた場づくりが必要で、いきなり机を付け合わせても対話はできない。向き合って話ができる状況を仕組む必要がある。
- ・対話のキーワードとして「3つのきく」（聞く・聴く・訊く）がある。
聴く：耳＋目＋心で聞くことが重要だが、聞き流してしまう場面は多いのではないかな。
訊く：ask（尋ねる）自己対話をしながら聞くことが大切である。
- ・子どもにさせようとする前に、大人ができているのかを考えなくてはいけない。意識しないとできない。
- ・高校生意識調査アンケート調査結果の丹後地域を好きという割合が9割については特筆すべきこと。その背景には、丹後地域には親と学校の先生以外の地域の人たちとの対話がある。

- ・人との出会いが大事。しかし、本音話してくれない子どもが増えてきている。地域の人たちとの対話ができる地盤があるうちにメッセージの浸透を仕上げないといけない。
- ・メッセージが浸透していくには時間がかかる。ガムではなくスルメみたいに噛めば噛むほど味がするような使い方ができるのがよい。

(3) 対等性について

- ・家の中では親と子の上下関係。学校でも教師が権威的であり、子どもと上下関係になっている。上下関係があると忖度、嘘が生まれてくる。
- ・芸術やスポーツにはそれを覆することができるヒントがあり、学ぶべきものがある。
- ・例えば、リレーで転倒する姿など、大人が格好悪い姿を見せることも大切である。一方で、転倒せず走り続ける子どもに対して尊敬の目を向けることも必要である。
- ・探究活動も同様に、指導する教員が上ではなく、生徒と並走する関係である。大人も探究を深くは知らないし、生徒も大人が難しそうにしていることが分かれると対等性が生まれてくる。
- ・対等性を担保するのは心理的安全性と立場的安全性であり、それらが議論の余白も生み出してくれる。
- ・府立福知山高等学校が実施する土曜講座では、教員自身が探究する姿を見せる取組をしている。探究を教えようとしても失敗する。教員も生徒と一緒に取り組み、失敗談をたくさん話すことで学びがある。

(4) 対話の先にあるもの

- ・メッセージの浸透を含めた対話の先にあるものは、ウェルビーイングになるだろう。
- ・ウェルビーイング3条件は、①選択肢があること、②自己決定できること、③3つ以上の居場所があること
- ・子どもだけに押し付けるのではなく、大人も子どもも共有し合うことが重要

(5) 広報活動について

① 福知山市のポスター「福知山の変」

10人ほどの福知山市で活動する人たちを活用している。まずはこの協議会のメンバーが主役となってメッセージを発信していく形であってもよいのではないかな。

② 虫食いクイズの活用

- ・虫食いクイズのフォーマットを活用し、子どもの珍解答が引き出される形もよい。
- ・協議会メッセージを虫食いの形にして大喜利すると、面白おかしくなる。ただし、行政が笑いに走ろうとしても冷ややかな視線と批判を浴びることになるので、行政は箱だけ用意する。
- ・キーワードは、「参加型」ということである。

